

村上春樹とスポーツイベント、スポーツ観 —活字媒体を中心に—

清水 泰生*

Haruki Murakami and his View of Sports and Sports Events - Mainly from print media -

Yasuo Shimizu*

Abstract

Haruki Murakami is a runner a triathlon athlete. What does he think of sporting events? This paper considers his outlook on sporting events and sports based on his essays and collections of articles about the Olympics and marathons, etc. In addition, his literature is examined from this point of view.

His outlook on the Olympics was described in "Sydney" in detail, saying that the Olympic Games were boring. In addition, in "Yagate Kanashi Gaikokugo," he wrote about marathons in Japan, criticizing Japanese sports, social formalism, and authoritarianism.

Finally, based on his view of sports and sporting events, the ideal Tokyo Olympic Games 2020 is discussed.

キーワード

ランナー、メガイベント、オリンピック、マラソン大会、スポーツ観

1. はじめに

2020年は東京でオリンピックが開かれる。そして、市民マラソン大会など毎年、世界でいろいろなスポーツイベントが開かれる。

さて、村上春樹はこういったスポーツイベントをどのように見ているのだろうか。また、スポーツについて彼はどのように思っているのだろうか。彼の創作活動にも大きく影響を及ぼしたランニング、そして世界最大規模のメガスポーツイベントのオリンピック等を中心に考察したいと思う。

* しみず やすお：大阪国際大学国際教養学部非常勤講師（2017. 12. 1 受理）

2. 本発表とスポーツ学、スポーツ言語学、村上春樹研究の位置づけ

本稿の村上春樹のスポーツイベント観はスポーツ社会学のメガスポーツの分野に入る。そして、スポーツ観は体育原論、体育哲学にあたる。そして、村上春樹のスポーツについての名言等の分析はスポーツ言語学¹に当たる。

さて、村上春樹の文学や文体等の研究は行われているが、スポーツに関する研究はほとんど行われていない。村上春樹自身、エッセー、著書等で、文学活動をする上でランニングが大切であったと述べている。だから村上春樹のスポーツを研究して村上文学を考えることはきわめて重要なことであろう。

3. 村上春樹のランニングイベント（大会）観

村上春樹のランニング大会について端的に述べている書がある。『やがて哀しき外国語』中の「アメリカで走ること 日本で走ること」である。

ここで、村上はアメリカのランニング大会と日本のランニング大会との比較を行っている。日本のマラソン大会は窮屈だ。そして、日本のマラソン大会のプログラムには、(必要とは思えない) 選手の名前が記載され、大会当日にも市長や知事等の挨拶が行われているところもある。それらはやめてほしい、また、事前申し込みが多く気軽に参加できないなど日本の形式主義を批判しているのである²。

確かに、日本のロードレースの大会は他の国のと違って運営がきっちりしているが、融通が利かず、堅い。論者が参加したイタリアのベニスマラソン（2015年）、オーストリアのウィーンシティーマラソン（2016年）、韓国のソウル国際マラソン（2016年）などは、国際陸上競技連盟のロードレース格付けでブロンズラベル以上のレースであるにもかかわらず、コースの途中ロープで観衆とランナーとを区別していなかったところが、ところどころにあった。（論者は東京マラソン2008年、2009年、2010年、2017年と走ったが、コース全体にわたってロープでランナーと観衆とをはっきりと区別していたように記憶している。）また、ベニスマラソンやウィーンシティーマラソンの大会プログラムに選手者名簿というものが存在していなかった。同じアジアであるが、ソウル国際マラソンは、招待選手と韓国国内のエリートランナーが記されていたが、ほかの選手（たとえば韓国の平凡な記録の市民ランナーや海外の市民ランナー）の名前はプログラムに載っていない。プログラムに氏名が載っていないのだから所属というものもない。ウィーンシティーマラソンのように大会HP³で検索すれば、参加者がわかるというマラソン大会もあるが、それでも住んでいる都市名が出ていてもその人個人の所属はない。日本の場合、村意識、帰属意識が強いと一般に言われていて、一方、欧米は個人が主体である。こういうことが、マラソンのプログラムにでも現れているのだろうか。日本とアメリカなどの他の国の文化、社会の違いが垣間見られるようである。

そして、アメリカニューヨークやスペインバルセロナなどの都市は毎週のように10キロ程度の距離のロードレースが行われ、アメリカの場合、当日でもエントリーができるようになっていて、実際、論者が参加した2014年のレース（レース（NYCRUNS Mother's Day 5K and 10K races）は10キロと5キロの部があって論者は、10キロの部に参加した）は、

参加費が前日申し込みより高いが、当日申し込みはあった。2015年もそうであった⁴。また、そのような大会では、プログラムさえもない。(論者が参加した大会(NYCRUNS Mother's Day 5K and 10K races)はプログラムさえなかった。連絡等は、メールで送られてきた)このレースは草レースなので入賞者の賞品も日用品であった。ゴールのあとのドリンク以外にパンも配布され日曜の朝を充実した朝になるように配慮している⁵。ただし、参加賞はTシャツだけであった。

村上春樹は、東京マラソンなどのようなメガランニングイベントを注目するのではなくて、論者が述べたような草レースを大切にすべきだと村上(2011)で述べている。また、彼は手づくりのレースの重要性を述べ、そして、ランナーはフルマラソンだけでなく10キロなどの短い距離を参加すべきであることを主張している。

村上春樹はボストン、ニューヨーク等で生活してきたのでアメリカの東部のランニング文化に影響を受けたと考えられる。

それらのランニング文化は市民レベルから日常的に生まれた文化である。一方、日本のランニングの場合、昔から主催は新聞社、学校関係、地方自治体とお上が主催した大会であって上から下への目線の大会である。それが小さな大会にも浸透している。村上春樹は、日本とアメリカとの大会のギャップを感じているといえよう。

そして、村上春樹がアメリカのマラソン文化、世界最古のマラソンボストンマラソンの影響を受けたことを端的に表しているものとしては、ボストンマラソンテロ事件の追悼文(『ニューヨーク Yorker』2013年4月30日⁶寄稿)があげられる。

自分をランナーと呼ぶ、ひとりの世界市民から - 村上 春樹 -

(村上春樹氏のボストンマラソンへ向けた追悼文 by 山本 修敬 より 翻訳 山本 修敬⁷)

僕は過去30年で33回のフルマラソン大会に出場している。
世界中の大会を走ってきたなかで、どの大会が一番好きかと問われれば、すぐさまボストンマラソンと答えるだろう。ボストンマラソンには6回も出場しているのだ。
何にそれほど魅かれるのか。その答えは単純だ。もっとも古いレースであること、そして美しいコース。いやもっと大事なことがある。それはすべてが自然で自由なことだ。
ボストンマラソンはトップダウンではなくボトムアップのタイプの大会。ボストンの人々が、長い時間をかけて、着実に、思いを寄せて作り上げたもの。毎回このレースを走ると、長年にわたり大会を作り上げてきた人々の思いがあふれ、僕は温かな光に包まれ、懐かしい場所に帰ってきた感覚になるのだ。これは不思議だ。もちろん、他にもすばらしいマラソン大会はある。ニューヨークシティーマラソン、ホノルルマラソン、アテネマラソン。でも、ボストンは特別なのだ。(他のマラソン大会関係者には申し訳ないが)(中略)

ボストンマラソンに出場し、ヘレフォード通りのコーナーを曲がったボイルストン通りにさしかかれば、まっすぐで広い道の終端にコプリースクエアの横断幕。そこには言いようのない興奮と安堵がある。完走は自分自身で成し遂げることだが、まわりには走り続けさせた人々がいる。休暇をとりマラソンを支援する無償のボランティアたち、沿道で応援する人々、前を走るランナーたち、後ろを走るランナーたち。彼らの励ましと支援がなければ、ゴールできないのかもしれない。⁸

下線で記した通り、村上春樹は市民が支えているボストンマラソンをこの上なく愛しており⁹、これこそが真のスポーツであることを主張している。

最近、日本各地でマラソン大会が行われている。2007年の東京マラソンを皮切りに奈良マラソン、大阪マラソン、神戸マラソン、京都マラソンの関西四大市民マラソンが開かれ、そして、2015年には富山マラソン、岡山マラソン、金沢マラソン等が生まれた。ただ、これらは経済効果、ふるさと再生、地域活性化の掛け声の下に役人主導の大会である。これらの市民マラソン大会については村上は何も述べていないようだが、これらに大会に関してもおそらく、村上はいい顔をしていないように思われる。

そして、このエッセーでは、ホノルルマラソンを嘆いている。最近、ホノルルマラソンがメガイベント、商業化、お祭り騒ぎになっていて、走るのが日本人が大半を占めるということである。ホノルルの住民が何も恩恵を受けていない。それどころか迷惑をこうむっていると述べている¹⁰。このことに対して村上はいい顔をしていない。

このことは村上春樹が、メガスポーツであるオリンピックがつまらないことと合い通じるところであろう。このことについてはオリンピックのところで述べてみたい。

4. オリンピックと村上春樹

上記のように村上春樹は民間から生まれたものに価値を置いて国家的なものや商業化、メガスポーツ化したものは軽視しているように思われる。

オリンピックも当然メガスポーツなので、オリンピックも否定している。そして、村上春樹は、「世の中の多くはオリンピックは実は退屈なものなんだという事実からずっと目を背けているが僕は目を背けません」、「オリンピックは実は退屈なものなんだという峻厳な事実から一つ認めなくてはならないことがあります。ある種の純粹な感動は、限りのない退屈さの中からこそ一麻醉性の中からこそ一生まれてくるのだということです。」「(少なくとも僕にとってのオリンピック・ゲームとはということだが) そのような密度の高い退屈さの究極の祭典なのだ。」と『シドニー! ①』で述べている¹¹が、正面切ってその問題を受け止めようとする姿勢が見られる。

そして、重松(2004)によると、村上春樹は、マラソンで鍛えた体が退屈さを正面で受け止めることをなしているようである¹²。そして、重松(2004)によると、1987年刊行の『THE SCRAP 懐かしの1980年代』(文芸春秋)で村上春樹は以下のことを述べている。

「今回のロス・アンゼルスオリンピックにはあまり興味が持てない。」

「今日は新聞を読まなかったのでオリンピックのことはよくわからない。」

「オリンピックとはあまり関係のない話ですけど。」

「このオリンピック日記もオリンピックのことにほとんど触れないまま、あと一回で終わろうとしている。」¹³

などと五輪を無視して言いたい放題述べている。

そのときは、すでに村上春樹は、ランニングに取り組んでいたが、まだ、退屈さと向き合うだけの精神的、肉体的体力を持っていなかったかもしれない。

村上（2015）は、長編文学作品をなすためには、体力が必要であり、それをランニングなどのスポーツで鍛えると述べている¹⁴。長編小説を書くということは、単調な長い作業である。それをなすためにはやはり精神的にも肉体にもタフでなければならないであろう。ランニングは動きが単調でしかも時間が長いので長編小説を書く際の疑似体験に当たるのではないかと思う。

以上のことから、ランニングが、村上春樹の文学作品に大きく影響を及ぼしているといえよう。また、重松（2004）によると「1990年以降の村上春樹は、短いチャプターで構成された80年代型・村上春樹を脱ぎ捨てた」と述べている¹⁵。82年に村上春樹はランニングを始め、その影響が1990年代に出てきたのかもしれない。なお、重松（2004）が指摘した短いチャプターがなくなったことは、清水（2017）で、ランニングをすることで村上の作品の文体が長くなったと述べたことと合い通じる¹⁶。

以上のことから牧野（2013）がいう音楽が村上の文体に影響を与えたということだけではなく、清水（2017）が述べている¹⁷とおり、音楽だけでなくランニングも村上の文体に影響を与えたと言えるであろう。

村上春樹は、オリンピックで面白いのはマラソンと述べているが、自分がやっているから興味があるので当たり前なことだといえる。そして、頼（2015）が『シドニー！①、②』でマラソン（99回）とトライアスロン（47回）の出現回数が多いことを報告している¹⁸が、それは、自分がその競技種目しているので自然とその種目に目がいくのは当然だといえよう。そして、頼（2015）は『シドニー！①、②』で多く取り上げたスポーツは、上記以外に野球（45回）サッカー（41回）であると述べている¹⁹。野球、サッカーは日本で人気のあるスポーツであるので自然と目が行ったであろう。この野球についても野球後進国オーストラリア野球場で、そこでの牧歌的な光景が、本当のスポーツのあるべき場所と思っている²⁰。

5. オリンピックのマラソンについて

村上春樹は『シドニー！①、②』でシドニーオリンピックでの夢にかなわなかった男女のマラソン選手（シドニーオリンピックで棄権の犬伏孝行と代表を逃した有森裕子）について詳細に述べている²¹。はなやかなものに当てるのではなくてありふれたもの、日常的なもの、陰になったものに光を当てることが大切だということを村上は述べているであろう。

『シドニー！①、②』で、マラソンとトライアスロンのレースできめ細やかでかつ的確なレース分析をしている。しかし、村上は、100m、マラソンはオリンピックの華といわれているがその中間は華やかでない。なぜなのか分からないと述べている²²。これは、的外れな見解だといえる。欧州（特にイギリス）では、中距離特に1マイルは人気のある競技である。アフリカならば5000mなどがそうである。村上春樹は一般の日本人と同様、中距離、長距離（トラック）軽視、不勉強である。

そして、競技種目によっては、読み手に面白おかしく表現していると感じさせるところがある。たとえば、『シドニー！②』でシリアスにマラソン選手の様子を述べているのに対

して『シドニー！①』では砲丸投げに選手に対して「砲丸投げのおっさんたち」²³と言って相当くだけた表現、内容で書いている。ということは、あるスポーツについてはこだわりを持っているが、そうでないスポーツについては驚くほどお軽く考えているのである。

6. 市民マラソン観

村上春樹は、市民ランナーをこう位置づけている。

一般的にマラソンの素晴らしさは競争の無いことといわれる。世界レベルのランナーは激しいライバル意識を持つこともあるだろうが、私も含む大多数のランナーにはタイムは特別なことでは無い。マラソンは競争ではないのだ。

42.195 キロのランニングの経験を得るためにレースにエントリーし、そのレースを楽しむ。そして、少しばかりの痛みから、徐々につらい痛みとなり、最後にはその痛みさえ楽しめるようになる。このわずらわしいともいえるプロセスを他のランナーと共有することもマラソンの楽しみのひとつといえるのだ。

42.195 キロを走れば、3時間、4時間もしくは5時間の苦行を体験することとなる。ただ、他のランナーと一緒に同じ距離を走るとは、つらさをいくぶんかやわらげてくれる。マラソンは肉体的にきつい。もちろんそうにきまつてる。でも、そこには人と人の連帯や結末の感覚があり、それらがフィニッシュラインへ導いてくれるのだ。²⁴

つまり、市民ランナーは相手との戦いでなくて自分との戦いである。(このことは村上(2011)のインタビューの中にもよく現れている。)そして、それを見ている人や一緒に走っている人が背中を押してくれると村上は述べている。村上自身も相手がライバルでなく自分自身がライバルというスタンスを取っている。上記の考えはその延長線上にあるものだと言えよう。

7. まとめ

村上春樹は、商業的な、お役人指導のトップダウン的なメガイベントを否定している。そして、市民からの生まれたありふれた日常的なイベントを大切にしている。このことが彼のエッセー、新聞記事等で多く見られる。そしてオリンピックのメガイベントは退屈なものと考えている。『シドニー！①、②』では村上のしているスポーツを中心に観察しており、あまり経験していないスポーツとの扱い方などの差が顕著に見られた。

8. 今後の課題

村上春樹のスポーツイベント観が実際の彼の小説にどう影響を与えたのか。

また、彼の小説は彼のランニングを中心としたスポーツイベント観、スポーツ観にどう影響を与えたのかについては考察できないでいる。(ただし、彼のランニングが小説に与えた影響については清水(2017)で言及している)今後の課題である。また、他の小説家、たとえば、三島由紀夫達の小説家のスポーツ観、スポーツイベント観、そして、スポーツ

と文学作品と比べてどういう特徴があるのかについても手付かずであった。これらを今後の課題としたい。

最後に、上記のこととは違うことになるかもしれないが村上春樹はボストン、NYC マラソンなど参加が難しいマラソンをどのようにして参加できたかについて私の知る限りだれも言及していない。参加資格タイムで出場権を取ったのかチャリティー枠で取ったのかそれとも別の方法で取ったのかは、わからない。どの参加枠で取ったかによって彼のランニングに対する考え方が垣間見られるかもしれない。そう言ったことも次回調査、考察を行いたい。

9. 最後に—東京五輪 2020 に向けて—

村上春樹のスポーツイベント観は、スポーツ運営はトップダウンではなく市民レベル、草の根から生まれてくるものであり、その端的なメガスポーツイベントの例は、彼がこよなく愛したボストンマラソンであることを本論で述べた。東京五輪が近づいてきているが、私の知っている、きいている限りでは自治体、国のみが一生懸命になっていて、市民の熱意、声等が反映していないようである。それでは、スポーツレガシーとしてのスポーツ文化が残らない。日本社会はオリンピックへ向かって進んでいるが、少し立ち止まって、私たちは、村上春樹のエッセー等を読み直してスポーツイベント、スポーツがどうあるべきかをもう一度考えなければならないであろう。

資料『Sports Graphic Number Do』2011年4月号より

Q.1 今までいろんな場所でジョギングをされていますが、思い出に残る場所を3つ選ぶとしたらどこでしょうか？（40代・男性）

街ではボストンが最高です。チャールズ川沿いのハーバード大学あたりをずうっと走る。素晴らしいコースですね。冬は道路が凍りついちゃって走れないんだけど。それから、京都に行くといつも鴨川沿いを走るんです。御池あたりから上賀茂まで橋をいくつもくぐって走って帰ってくるとちょうど10kmぐらい。あそこはいいですね。もうひとつは、ニューヨークのハドソン川沿い。ソーホーからジョージワシントンブリッジのあたりまで、ランニングのためのコースをニューヨーク市長が作ったんです。信号もないし、トイレと水飲み場もところどころにあって素晴らしいですよ。セントラルパークもいいけれど、最近ソーホーあたりに泊まってハドソン川沿いを走るのが楽しいです。

Q.2 出場したレースで印象に残っているのはどこですか？（30代・男性）

ボストンに勝る大会はないですね。6回くらい走ったけど、街のDNAとしてマラソンが染みついているんです。ボストンマラソンなしにボストンという街はないんじゃないかというぐらい不可分の存在なんです。街の営みのひとつとして溶け込んでいるんです。100年間ほとんど同じコースを走っていて、武次第のようなものが全部決まっているから、僕らはただその流れに乗って走ればいい。どの地点でどういうバンドがいるか、どこでロッキーのテーマがかかるかも分かっている。（中略）そして、ゴール後はよく冷えた地元のエールビールを飲んで、牡蠣を食べに行って幸福な気持ちになれる。「よくやったね」と

ウエイトレスが背中をとんと叩いてくれる。レースというのはそういうふうにあるべきだよ。お祭り騒ぎである前に。

脚注

- ¹ スポーツ言語学については清水 (2015) 参照
- ² 『やがて哀しき外国語』 pp.74-85
- ³ ウィーンシティーマラソン HP URL <http://www.vienna-marathon.com/> (2017年11月20日採取)
- ⁴ 詳細については <https://nycruns.com/races/?race=nycruns-mothers-day-5k-10k-2016> (2017年11月20日採取) 参照
- ⁵ 今年2016年の大会は賞金レースのようである。村上が理想とする大会に遠ざかったかと思う。
- ⁶ 原文: BOSTON, FROM ONE CITIZEN OF THE WORLD WHO CALLS HIMSELF A RUNNER <http://www.newyorker.com/books/page-turner/boston-from-one-citizen-of-the-world-who-calls-himself-a-runner> (2017年11月20日採取)
- ⁷ <http://iriocreatives.seesaa.net/article/358978528.html#comment> (2017年11月20日採取)
- ⁸ 下線は論者が記した。以下のところも同様。
- ⁹ 「資料」は、ボストン、NYCのコースを愛しているのを端的に表している例である。
- ¹⁰ 『やがて哀しき外国語』 pp.74-85
- ¹¹ 『シドニー①』 p.117, p.118 なお、『シドニー①』は、村上春樹『シドニー! コアラ純情編』文藝春秋、2004。『シドニー②』は村上春樹『シドニー②ワラビー熱血編』文藝春秋、2004を示す。以下の本文、注も同様である。
- ¹² 重松 (2004) p.67
- ¹³ 重松 (2004) p.67
- ¹⁴ 村上 (2015) p.75
- ¹⁵ 重松 (2004) p.21
- ¹⁶ 清水 (2017) p.99
- ¹⁷ 清水 (2017) p.99, p.100
- ¹⁸ 頼 (2015) p.62
- ¹⁹ 頼 (2015) P.62
- ²⁰ 『シドニー①』 pp.155 - 157
- ²¹ 『シドニー①』 pp.11 - 50
『シドニー②』 pp.183 - 237
- ²² 『シドニー①』 p.243
- ²³ 『シドニー①』 p.228
- ²⁴ 村上春樹氏のボストンマラソンへ向けた追悼文 by 山本 修敬 より

参考文献

- 重松清『スポーツを「読む」』集英社、2004
- 清水泰生「『オリンピック日本語会話』(テキスト)構想」第22回プリンストン日本語教育フォーラム Proceedings、2015
- 清水泰生「村上春樹とランニング—活字媒体を中心に—」『国際研究論叢』第30巻第2号、2017
- 牧野成一「村上春樹の日本語はなぜ面白いのか—文体を中心に—」Proceedings of Central Association of Teachers of Japanese Conference, 2013

村上春樹とスポーツイベント、スポーツ観—活字媒体を中心に—

頼錦雀「『シドニー！』から見た村上春樹の異文化観—日本語教育への示唆—」『2015年 第4回村上春樹国際シンポジウム予稿集』2015

(大会公式プログラム)

ソウル国際マラソン 2016年公式プログラム

ウィーンシティーマラソン 2016年公式プログラム

ベニスマラソン 2015年公式プログラム

東京マラソン 2008年から 2010年公式プログラム

(テキスト)

村上春樹『THE SCRAP—懐かしの1980年代』1987

村上春樹『やがて哀しき外国語』講談社、1994

村上春樹『村上朝日堂ジャーナル うずまき猫のみつけかた』新潮社、1996

村上春樹『シドニー！コアラ純情編』文藝春秋、2004

村上春樹『シドニー②ワラビー熱血編』文藝春秋、2004

村上春樹『走ることについて語るときに僕の語ること』文藝春秋、2007

村上春樹「僕は走り続けてきた、ばかみたいに延々と」『Sports Graphic Number Do』2011年4月号
(文春文庫)、2011

村上春樹『職業としての小説家』株式会社シイッチ・パブリッシング、2015

本稿は2016年5月28日第5回村上春樹国際シンポジウムでの口頭発表を発展させたものである。